

サウジ アラビア王国の国旗（緑地に白）
上方の文字はイスラム教の聖典（コラーン）
中の有名なことば「神は唯一無二モハメッ
ドは神の使者なり」である。

サウジアラビア王国紀行 ～ 建国の歴史～

小村 幸二郎

はなれて3日目に ホンコンからバンコックへ向った。ホンコンを出発した機は 間もなく南支那海の西はじをかすめて やがてベトナムの上空にさしかかる。最近とかく問題の多いところだけに ベトナムのたたずまいには興味もっていたが どうしたことか 快晴の海上とはうって違って その上空は厚い雨雲におおわれていた。そして間もなく 機は不気味にゆれだした。まるでベトナムの現状を訴えてでもいるかのよう……

ホンコンを出てからおよそ2時間後に 雨雲のさけ目からきれいにせいらされた水田地帯が見え その後約25分でバンコック空港に着いた。

29日夜10時30分 そぼ降る雨にうるむバンコックの町の灯に別れを惜しみながら 空港へ向う。午前1時20分 ジャカルタからきた飛行機に乗り込む頃には 大粒の雨がたたきつけるように降りだし やがて機は 大きくゆれながら 雨雲の中を急上昇する。バンコックの灯はまったく見えず。離陸後間もなく 厚い雨雲をつきぬけて 10000m の飛行高度に出る。窓外を見ると 今まではげしい雨の中を泳ぐようにしてきたことがまるでうそのように 夜空にきらめく南国の星が しばし夢幻の世界にいざなってくれる。外気の温度 -30°C 風速7mのアナウンスが信じられないほど 機内はねむけをよもおすほどよい暖かさで静けさである。

カラチ空港で50分間休んだ後テヘランへ向う。東の空が白み 広漠たる大地が次第に浮き彫りにされてくるにつれて 地質や根性がむくむくと頭をもたげ 目は窓からはなれない。イラン高原に横たわるさまざまの地質構造に胸をおどらせ ルート砂漠の特異な地形に嘆声をあげながら 時のたつのを忘れる。そして後日のためにと 連続的にカメラのシャッターを押した。

カメラ歴の割合いに古い私は これらの撮影に絶対の自信をもってシャッターを押したのだが 後日現像されたこのフィルムはほとんど物の形をとどめてはいなかった。そしてやりくりさんだんしてやっと買った安カメラによって 遠い異国にきてまで 私は薄給にあえぐ貪乏科学者の身であることを思いしらされてしまった。

テヘランの東方に広がるカビール砂漠を越える頃 突

「アラー アクバル（神は偉人なり） ラーインラー イラハー インラー アラー（神は唯一無二）……」

払暁の空を真紅に染めて陽が昇る頃 突如 静寂を破って 砂漠をわたる朗々たる祈りの声。はるかなる聖都メッカに向い 大地にひれ伏して われを忘れ 神に祈る人々の姿には 何者にも犯されない 気高さと美しさがある。そして 焼けつくような サウジ アラビア王国の一日がはじまる。果てしなくひろがる砂漠 焼けただれたような肌もあらわな山々 そこには 疲れ果てた身を横たうべき緑蔭はない。そして じりじりと生きる物 死に絶えたもののすべてを焼きつくすかとおもわれる太陽の直射光の下で 乾ききったのどをうるおす水も乏しく 時には死の恐怖におののきながら 来る日も来る日も 辛いそして苦しい調査が進められていった。サウジ アラビア。多くの人は この地に思をはせる時 「世界の地の果て そして人間の住むべき所ではない」という。しかし いかにか苛酷なことが待ちうけていようと 死の恐怖にとらわれようと そこではなされなければならないことは多い。

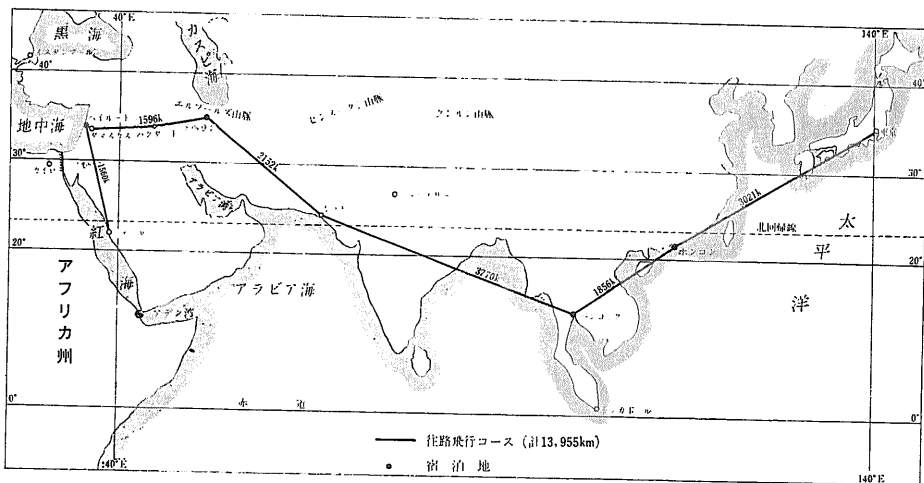
サウジ アラビア。そこは 果たして 「世界の地の果て」であろうか？

1年半の間 この国の奥地で きびしい自然条件にさいなまれながら 資源開発のために挺身した者の目に映じたこの国の現状をお知らせしよう。

サウジ アラビア王国へ

羽田から レバノンの首都ベイルートまでは 西まわりのジェット便で およそ19時間を要する。昭和38年9月26日午前11時30分 私たちをのせたエールフランスの大型ジェット機は はげしく身をゆすりながら 南へ向って 雨上りの青空の中へ吸いこまれていった。自然美にいだかれた故国に別れ 灼熱の砂漠の国へ向うかと思うとついセンチになる。

飛行機の都合でホンコンで休養した私たちは 日本を



第1図 旅行経路図

然 右手前方に富士山にそっくりの山が現われ その頂上近くには数条の雪渓が見えた。テヘランとカスピ海との間に横たわるエルブールズ山脈の秀峯ラマベンド山(5604m)である。やがて 眼下に砂漠を真一文字に突走る道路や一かたまりづつの村落が見え 機は間もなく大きく旋回して 高原の町テヘランへ着いた。抜けるように青い空 ひんやりとした澄みきった早朝の空気が砂漠の中のことをしばし忘れさせる。

10月1日午前8時 テヘランに別れを告げてベイルートへ向う。果てしない砂漠と荒々しい山 そして所々に見える真青の湖の色が目にしみる。チグリス ユフラテス川に沿って広がるメソポタミアの豊饒地帯やバグダツドのたたずまいに栄枯盛衰の歴史をしのび けんらんたる古代文化を想い シリアの首都ダマスカスの上空にかかる頃には 機は降下態勢に入る。そしてレバノン山脈をすれすれの高さで越えたとたん地中海の青さがパーッと眼にとびこみ 間もなくレバノンの首都ベイルートに着く。ベイルートで一泊してすっかり元氣を取りもどした私たちは10月2日夜 サウジ アラビア航空のボーイングに乗り 中近東のパリと呼ばれる華やかなベイルートに別れを告げた。上空から見たベイルートの町の灯は 夜空をいろどる大粒の星か真珠の輝きにも似て 私たちに感動と心の安らぎを与えてくれた。しかしそれもつかの間 ふたたびレバノン山脈を越えたボーイングは 漆黒の闇の中を南へ南へと向う。シリア砂漠をわたりネフェード砂漠を過ぎ ベイルートを出てからおよそ1時間50分 機内で見えるアラビア人の顔や服装に目をうばわれ はじめて聞くアラビア語の会話に耳をうばわれている中に 目ざすジエッダ市の灯が見え ぐんぐん迫ってくる。

ジエッダ空港着10月2日午後11時30分。もう夜更けだというのにこの暑さはどうしたことだろう。機内から1歩外へ出たとたんむっとする異様な熱気で全身汗びっしょりになり これから1年半の間無事にすごせるだろうかと不安が胸をかすめた。

そして未知の国 き

びしい自然条件の下での生活がはじまったわけである。

位置 交通

サウジ アラビア王国と聞いて「どこにあるのですか？」とたずねる人が意外に多いので まずその所在地と交通路についてかんたんに述べておこう。

アジア大陸の西端部に近く いわゆる中東と呼ばれている地域の西端部に 雪国ではくワラグツのような形をして 突出している巨大な半島がある。これがアラビア半島で その東側はアラビア(ペルシャ)湾をへだててイランに相對し 南はアラビア海にのぞみ 西は紅海とアデン湾をへだててアフリカ大陸のアラブ連合 スーダン エチオピア ソマリアの諸国に相對しており 北の方はイラクやヨルダンにつづいている(第2図)。

この半島は 日本国土のおよそ7倍にあたる 2,600,000 km² ほどの面積をもち アラビア海に面する半島南端部の幅は約1800 km 南北方向に約2300 kmの長さをもっている。この半島にはいくつかの国や中立地帯があるが それらの中で一番大きい国がサウジ アラビア(サウド家のアラビア)王国で その国土は 日本国土のおよそ4.3倍もあり 北緯16°30' から32°15' 東経34°34' から57° にわたってひろがっている。

日本からこの国の玄関にあたるジエッダへ行くには次のようないくつかの経路がある。

- ① 東京→ベイルート→乗換え→ジエッダ
- ② 東京→カラチ→乗換え→ジエッダ
- ③ 東京→クエート→乗換え→ジエッダ
- ④ 東京→ダハラン→乗換え→ジエッダ
- ⑤ 東京→テヘラン→乗換え→バグダッド→乗換え→ジエッダ
- ⑥ 東京→パリ→乗換え→ジエッダ
- ⑦ 東京→ジエッダ(貨物船)
- ⑧ 東京→カフジ(タンカー)

これらの中では①の経路がもっとも便利である。念のために 私たちがたどった経路を第1図に示す。

アラビア。数々の歌にうたわれ 物語に書かれたここは 幼なかつた私たちの小さな胸に 夢と希望を与え未知への冒険心をはぐんでくれたところでもある。美しい自然の中に生きてきた日本人には 魔法の国 砂漠の国 石油の国 耐えがたい過去の因習にしばられた国としかうつつらないこの国は 今でこそ文明のおよばぬ国となつてはいるが かつては 世界文化の指導的役割を果たし 世界史上を飾る大イスラム(サラセン)帝国の立役者でもあつた。それなのにこの衰退ぶりはどうしたことだろう。現在の姿 それは過去の生んだ以外の何ものでもない。

この国の現状をよりよく理解するために アラビア半島に サウジ アラビアの砂漠の中にどのような歴史の流れが秘められているかをかいつまんで述べてみたい。

ジャーヒリア

アラビアの歴史は 大きくみて イスラム教発生以前とそれ以後とに区別される。そしてイスラム教が発生するまでの時代を ふつう ジャーヒリア(無明時代)と呼ぶ。ジャーヒリアという言葉は 字の通り 無知無明を意味するが そのほかに宗教的暗黒時代をも意味している。この頃 イエメンを中心とするアラビア半島南部には華やかな文化が栄えていたが 中央部や北部の砂漠地帯(第3図)では遊牧民(ベドウィン)が 羊やらくだを飼つて 細々と生活を営んでいるにすぎなかつた。そして宗教面ではいわゆる偶像崇拜が支配していた。ところが 半島中央部や北部の非文化地帯に住むベドウインは きびしい自然条件の下で 人間がなしうる最高の順応性をもって 平等の権利と義務を保有して 集団生活を営んでいた。文明の恩恵に浴し とかく奢侈におちいりやすい生活環境に生きていた半島南部の住

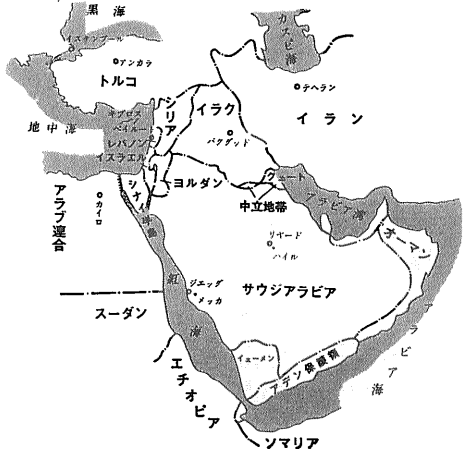
民に比べれば これら非文化地域に生きぬかなければならない住民の生活は われわれの想像もおよばないほど 苦しくそしてせつなかつたことだろう。しかし ここでわれわれが見のがすことができないのは 文明の世に生きるわれわれが現在のぞんでる生活条件・環境が当時 しごくあたりまえのこととして非文化地域に存在していた事実である。そしてこの生活様式と そこに生きる人々の力が 後に 大イスラム(サラセン)帝国建設の大きな源泉となつたのである。

苦しさの中から生まれた一つの理想の社会 それは いわず語らずの中に築きあげられた 生活の知恵の結集でもあろう。高度の文化に恵まれた現在の世の集団の中に生きるわれわれが真に求めるものの一つは やはり平等の権利と義務をもつ 納得のいく生活ではなからうか。目まぐるしい現実の中に がんじがらめにしばられた がつくりと肩を落した かぼそい自分の姿を見つめる時 自然の中にたくましく生きぬいてきた昔の人たちのそうした生活に郷愁めいたものすら感じるこの頃である。

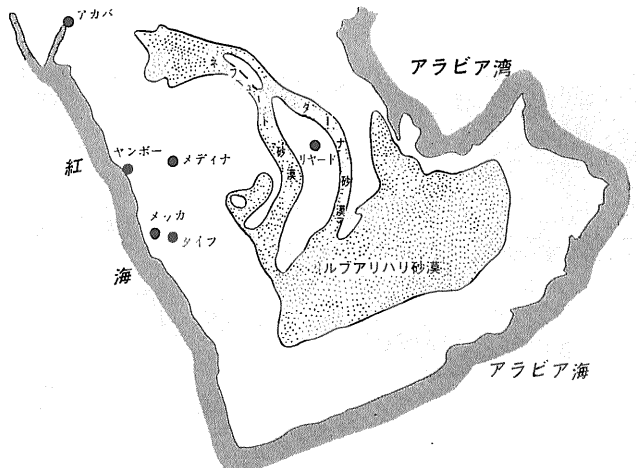
モハメッドの出現とイスラム教の勃興

無明時代 それは文明時代への胎動の時代でもあろう。そして イスラム教の創設者であるモハメッドの出現によって アラビア半島の情勢は一変した。

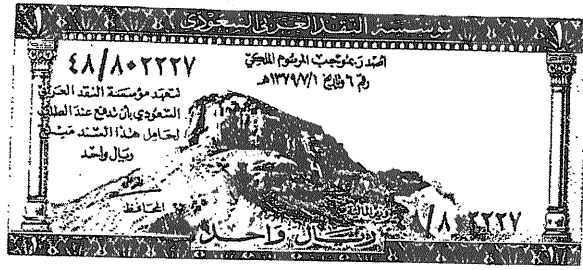
モハメッドは 紀元571年 メッカの名門クライシ族に生れた。父アブダラーはモハメッドの出生前に死に 母アーミナは彼が6才の時に死んだ。そしてその後は伯父アブー・ターリブによって育てられたが 12才の時には伯父の隊商に加わつてシリアへ旅した。17才の時メデイナの商家に働くようになった彼は 女主人を助けて懸命に働き 商用で 度々中東諸国へ旅した。偶像崇拜を心のよりどころとしていた当時のアラブの宗教に多くの疑問を抱きつづけていた彼は 度々の旅行を通じ



第2図 中東諸国の略図



第3図 アラビア半島の砂漠略図



第4図 1リアル(邦貨80円)札に印刷された「光明の山」

てキリスト教やユダヤ教などの一神教を研究した結果すべてのことは唯一の神の支配によって起こると信ずるようになった。25才の時 見込まれて女主人と結婚したが 彼が イスラム教の創設者として また アラブの精神的指導者として 名声を博するようになり得たのは 夫人の献身的内助の功があったからだといわれている。

一神教に深い造詣を得た彼は 神は唯一無二であることを信じて 天の啓示を授かるべくメッカへおもむき 近郊にある「光明の山」(第4図)の断崖にうがたれた「ヒラの洞窟」にこもって祈りに入った。そして紀元610年に天の啓示を受け ここに神の使徒としてのモハメッドが誕生したわけである。日夜洞窟に坐し 精神的苦痛とたたかいながら祈る彼の姿は かつてキリストがジェリコの町の背後にそびゆる「試練の山(40日の山)」(第5図)の頂で祈りつづけた時の姿をほうふつさせる。

悩み苦しみ そしてきびしい試練の果てに神の使徒となり得たモハメッドではあったが いつの世にもパイオニアが苦難の道をたどらなければならない宿命は 彼の場合にも例外ではなく 天命に強く生きようとする彼を 誹謗と迫害の渦の中に追いやってしまった。そのため

に モハメッドは 紀元622年7月16日 難をさけるためにメッカを脱出し 妻の待つメディナへののがれたわけである。これが イスラム教史上有名な ヘジラ(聖遷)で この日がイスラム暦の紀元元年になっている。

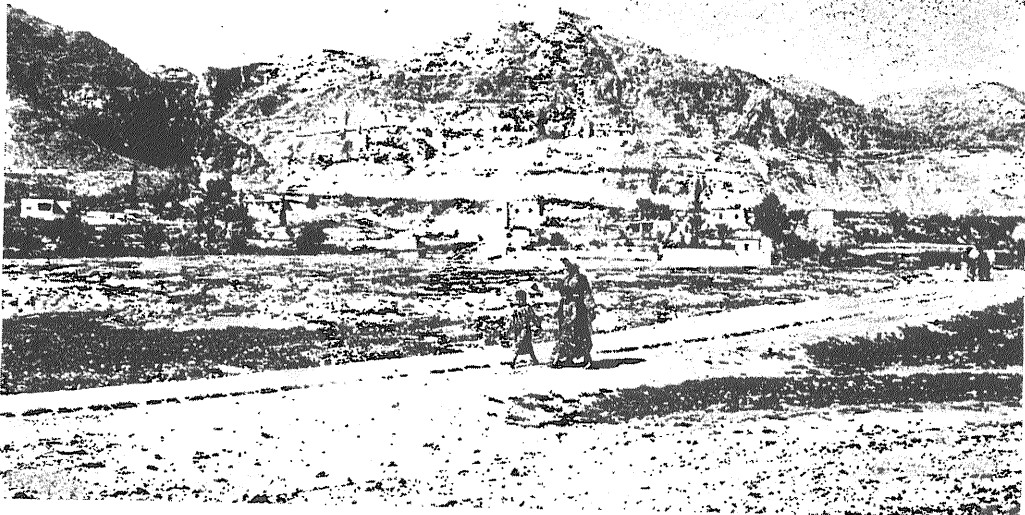
その後はモハメッドの努力と妻や親族の強い援助によって イスラム教は 次第にひろがり 現在では3億人以上の信徒をもつ 世界三大宗教の一つにまで発展したのであるが その驚異的發展の真の原因は何であろうか。イスラム教徒でない私にはもちろんわからうはずがない。しかし イスラム教が 不毛の地に興り 次第に他の不毛の地にひろがっていった事実(第6図)をみれば きびしい自然条件の下に生きていかなければならない宿命を負っている人たちが その心のよりどころを「すべてのものは唯一の神の思召しによる」と説くイスラム教に求めるのは自然の成行であろうと考えられる。

モハメッドは メディナへ帰ってからも 身に迫るはげしい迫害のために 寸刻の安らぎすら得ることができなかった。そして その迫害に対するイスラム教徒の戦い 宣教の戦いが随所に繰りひろげられ アラブは 部族対部族の戦いに加えて イスラム教徒対非イスラム教徒の戦いに明け暮れに至ったわけである。

イスラム帝国の盛衰

モハメッドの出現とイスラム教の勃興によって暗黒時代より眼ざめたアラブは やがてイスラム教の下に結集して 生きるにはあまりにも苛酷な自然条件の下をのがれて楽園を求めべく その進出のホコ先を東方へ 北方へ そして西方へと向けた。その進攻の速さはまさに疾風天を巻く感であったが その進攻にしたがった者たちの精神的支えとなったのは「天国は前方に 地獄は後方にあり」という信条であった。

メッカへの巡礼を終えてメディナに帰ったモハメッドは 神の思召しによって 間もなく 波乱に満ちた61年



第5図
ジェリコ郊外にある「試練の山」キリストはこの山の頂上で祈った 中腹にあるのは ギリシャ正教会

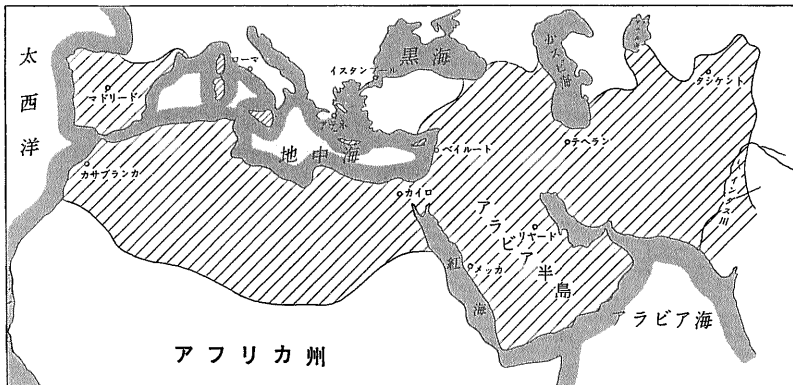


第6図
イスラム教徒分布
概念図(中近東挿
入図から作成)

の生涯を静かにとじた。紀元632年のことである。

そしてその翌年 アラビア半島に完全に根をおろしたアラブの軍勢はそのホコ先を北方へ向けた。ところがその前にはシリアのビザンチン帝国とイラクのサーサン帝国とが大きく立ちはだかっていた。しかし ツキはあくまでもアラブ軍にまわった。というのは約3世紀にわたって斗争していた両帝国は アラブ軍が進攻を計っている頃には 疲労の極に達し 国民は 重税と労働に耐えかねて 戦いの終結を強く望んでいたからである。そして その虚をついたアラブ軍は たいした犠牲もはらわずに 640年にはビザンチン帝国を 642年にはサーサン帝国をその軍門に降した。この征服と相前後して638年にはエルサレムが 641年にはエジプトがアラブ軍勢の手におちた。

アラブ軍の進出を機に 中東地域の情勢は大ゆれにゆれ 朝に興ってはタベに亡び うたかたの夢と消えた王朝は数知れず その多くはアラブ軍勢の前におちて 8世紀の前半 ここに大イスラム帝国の出現をみるに至ったのである。当時の領土は 東はインドシナ北部 北は中央アジア 西はアフリカ大陸の北部からイベリア半島におよび 一時期ではあったがヨーロッパではピレネー山脈を越えてフランス南部にまでおよび かつて権勢をほしいままにしたローマ帝国の領有地の2倍にも達した(第7図)。しかし「おごる者久しからず」のたとえにもれず 権勢をほこったこの帝国は アラブの宿命的内部対立と被征服者の抵抗とによって 11世紀頃から一



第7図 イスラム(サラセン)帝国領有地略図(8世紀中頃)

路衰亡の道をたどるに至ったのである。そして 1203年に大蒙古帝国をうちたてたジンギスカンの中近東侵略がその衰退に拍車をかけ 灼熱の砂漠に起こった栄光への進出は ふたたびきびしい砂漠の奥深くにとじこめられることになった。

ジンギスカンの軍勢の侵略途上における被征服地の住民に対する仕打ちは われわれの想像もおよばぬほど 惨虐をきわめた。そしてその仕打ちの跡は バビロンの栄華に酔い 幾世にもわたって栄えてきたバグダッドが 当時の痛手から完全には立直れず 今は砂漠の中のさびれた町と化していることからもうかがい知られる。

世界史上に傑出したアラブ軍勢の大征服 それは栄光への脱出ではあったろうが その興亡の歴史をひもといてみれば この征服が祖国にもたらしたものはあまりにも少なかった。欲望が野望に変わった時 そしてその野望が現実みにのりいかに栄華をきわめようとも その終局におとずれるものは破滅以外の何ものでもない。いたずらに肩をはった身分不相応の野望と侵略の果てにおとずれる破局 それは 過去にも 未来にも そして現在においても のがれることのできない人の世の掟であろう。

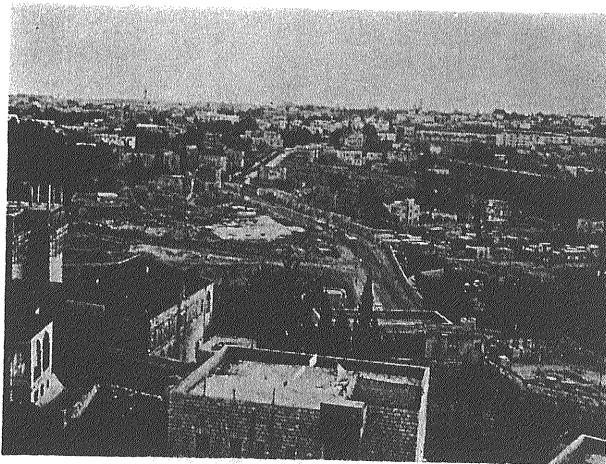
ジンギスカンの死後

1227年 アジアの大平原に侵略ののろしを高々とあげたジンギスカンが死に 1299年 世界史上に悪名高いウスマントルコ帝国が興ってまたたく中に中東一帯を席捲したが この帝国も1893年に亡びた。

ウスマントルコ帝国の末期に近い1869年に紅海と地中海とを結ぶスエズ運河が開通し アジアとヨーロッパとの交流に一大革命をもたらした。そしてこれを機として 西欧の経済発展の目標が中東におかれ 1400年にドイツがバグダッド鉄道敷設権を獲得したのはじまり それからは中東一帯に西欧の手がのびた。ドイツがイラクに手をのばしてから4年の後 1904年 日露戦争が勃発したが この頃の中東情勢は 当時のアジアの一部

の状況に相通ずる点が少なくなかった。その後1914年に第1次世界大戦が起こり 次いで第2次世界大戦が起こり 1948年にはユダヤ人の国イスラエル共和国とアラブとの間にパレスチナ戦争が起こった。

イスラエル共和国の成立に対するアラブの反感とユ



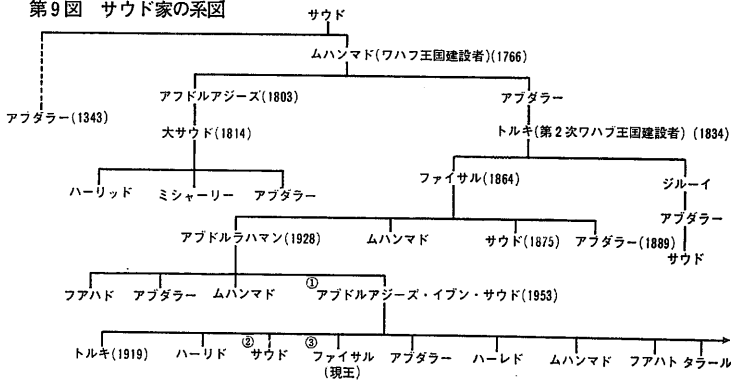
第 8 図 エルサレムの市内をとるヨルダンとイスラエルの国境（ムパサダホテルの屋上から） 道路より下方がヨルダン側 上方がイスラエル側 写真中央右手の家は パレスチナ戦争当時に破壊されたままになっている

ダヤ人に対するアラブの憎しみはわれわれの想像以上に根強く 現在なお イスラエル共和国とアラブ諸国との間にははげしい対立がつづいている。 エルサレムの町の中を通る国境線沿いには 今もなお 当時の戦火の跡が生々しく残り（第 8 図）トーチカにあげられた銃眼は冷い。 それにしても 鉄条網の蔭に咲く花の赤さはどうしたことだろう。 まるで血を吸って咲き狂ったような赤い花 それは美しいというよりはむしろ冷酷さを感じさせる。 20世紀の後半に入って間もない1952年カイロに暴動が起こり エジプトのクーデターが成功した。 そして翌1953年にエジプトは共和制を宣言し 翌年ナセルが首相に就任し 1958年にアラブ連合共和国が成立した。

1962年9月 「世界でもっとも神秘的な独立国」といわれているイエメンにおいてアブドラー サラル大佐の率いる革新派がクーデターに成功し イエメンアラブ共和国の成立を宣言したが 王制を支持する王統派と革命派との対立は続いた。

そして両派の争いは サウジ アラビア王国とアラブ

第 9 図 サウド家の系図



連合共和国との対立に発展したが 故ケネディ大統領の仲介が功を奏し この争いも一応終止符が打たれた。

しかし革命政権の基礎がじゅうぶんではないのでアラブ連合軍の完全引揚げには至らず 現在なお両派の間には対立が続いている。

サウジ アラビア建国の歴史

大イスラム帝国に代って興ったウスマントルコ帝国の支配は 16世紀には 東はペルシャ湾から西はアフリカ大陸の北西部に位置するモロッコ国境にまでおよんだ。そしてアラブは ウスマントルコ帝国 600年の圧政の下に 過去の輝かしい栄光を忘れ 放心状態で息をしていたわけである。 しかし アラブはいつまでもねむってはいなかった。 16世紀に入ってヨーロッパの勢力が侵入してくるにおよんで アラブは 目ざめ 偉大だった過去の栄光を認識し そしてその目ざめは次第に民族運動へと発展していった。

そうした頃 1880年11月 部族斗争に明け暮れていたアラビア半島の中央部リヤードに 1人の予言者と数多くの王をもつ家系（第 9 図）に アブドルアジーズ イブン サウドが アブドルラハマンの 3 男として生れた。

幼い時から戦乱の巷に身をゆだねなければならなかった彼は 10才の時 リヤードに近いハイールの町にあってネジドの王になろうと野心をもやしていたムハンムドイブン ラシードの攻撃の手をのがれて 父と共に 日射病や発狂と死の待つ白熱の大砂漠 ルブ アル ハリ（虚無の世界）に難を避けたのである。 いかなるキャラバンも立入ろうとはしないこの砂漠は 幼いアブドルアジーズにすら 容赦はしなかった。 時がたつにつれて きびしい自然条件にうちひしがれた身体は生気を失い ラシードの追跡の目をのがれるための精神的苦痛と恐怖に 死が一步一步近づいてくる。 そうした苦しい旅をつづけていたある日 父アブドルラハマンは 死が目前に迫ったことを知って 息子と 3 人の従者を呼び寄せ 「死への祈りを誦えよう」といった。 しかしその

時アブドルアジーズは すっと立上って 「私たちはここでは死なない。 私は 大きくなって アラビアを支配するのだ」と強くいい切った。

酷熱の砂漠のきびしさにさいなまれながら 死を目前にした少年の叫び。 それは 生への執着というよりはむしろ気高い希望へのひたむき

な斗志の現われであったろう。そしてその翌日 少年のあくなき斗志がもたらしたか この5人は クェートの首長がさし向けた騎馬隊によって奇跡的に救出されたのである。この奇跡的救出が 生も死も幸も不幸も神の思召しと信じて疑わないイスラム教徒の由緒ある家系に生まれたアブドルアジーズに 精神的たくましさ希望への躍動を強くうえつけることになった。

サウド家の再興をめざして辛苦の努力を続けていたアブドルアジーズは 雌伏10年 忠誠を誓う30名の部下を率いて ラシードの部隊が守るリヤード城に奇襲攻撃をかけ ついにこれを陥し入れることに成功した。時に1902年1月15日午前11時 彼が22才の時であった。そして奇しくも この時刻に 2代目の王となったサウドがクェートで生れたのである。その成功の陰にあったものは 彼とその部下の言語に絶するたゆまざる努力と遠くクェートの地で 留守を守り 夫の無事を祈りそして大成を信じて疑わなかった若き妻の涙ぐましい努力であった。

奇襲攻撃にすべてをかけたアブドルアジーズは それを成功させるためには まずラシードにアブドルアジーズが死んだと信じこませるのが最上策だと考え 誓を共にする精鋭を引連れて かつて父と共に追われてさまよった無限の大砂漠ルブ アル ハリへふたたび足をふみ入れたのである。一すじの煙 わずかの足跡が発見の手がかりとなる砂漠での放浪は 目的達成にはやる彼らを苦痛と失意のどん底にたたき落とし 死よりも苦しい訓練を与えずにはおかなかった。しかし 若い主アブドルアジーズに忠誠を誓う精鋭は よくその苦痛に耐え ついにリヤード城奪回の夢を実現させたのである。

ラシードのやり方に批判的であったリヤードの住民はたくましくそして慈愛に満ちたネジドの王アブドルアジーズの入城を迎えて 狂喜乱舞した。そしてアブドルアジーズは これを機に サウド家の悲願ともいべきアラビア統一の夢の実現に 大きく第一歩をふみ出したわけである。

それから後 ラシードの反撃 アブドルアジーズの反撃が繰り返されたが 部族としても家系や王朝の繁栄などからみても サウド家に対抗できるのは聖地メッカの守護職であったイブン キタダの直系にあたり モハメツドの流れをくむハシム家だけであった。そしてサウド家(アブドルアジーズ)とハシム家(フセイン)との対立は第1次大戦を通じて アラビアの立場そしてそれぞれの立場に重要な影響を与えることになったが ここでアブドルアジーズが選んだ道は やがて 彼をより早

く希望の塔へ導くことになった。

世界史上に忘れることのできない日 それは欧州諸国にとってはまさに運命の日であった。1914年8月2日 ポーランドとベルギーの平原に突如として立昇った世界第一次大戦の炎は またたく中に 東地中海沿岸に燃えひろがり アラビア統一を旨とするアブドルアジーズの若き血を湧き立たせた。

その戦いの進展を冷静に見つめていたアブドルアジーズの目は フセインとイギリス軍の動きに 注意深くそそがれていた。ダーダネルス海峡の戦いに破れ ペルシャのクテシフォンに破壊された英軍の降伏は 中近東における イギリスの威信を失う結果を招いた。そして その失墜挽回を計ったイギリスは シナイ半島を陥し パレスチナからイェルサレムそしてシリアのダマスカスへの進攻をもくろんだが この作戦はイギリス軍懐滅の危機をはらんでいた。というのは この頃 アラビア半島の北部ヘジャース地方にはトルコ軍が駐留しており この進撃を 側面から トルコ軍につかれるおそれが多分にあったからである。イギリス軍とトルコ軍との激突 それはアラビア半島からのトルコ軍の撤退とアラビア統一を旨とするアブドルアジーズの偉業の早期達成の要素を含む大関心事であった。そしてこの瞬間を砂漠の豹アブドルアジーズは手ぐすねひいて待構えていた。千載一遇の好機 その時のアブドルアジーズとその忠実な部下の「わが事成れり」と狂喜乱舞する姿が目につかぶ。

ところが 「好事魔多し」のたとえにもれず ここに思いがけない事件が起こり アブドルアジーズは深い苦悩の淵に身を投げなければならなくなった。その事件とは 1916年11月6日 フセインが ヘジャースの独立を宣言し イギリスと同盟をむすんだことである。そしてこの同盟は イギリスにとってはダマスカス進攻のための大きな助力を得たことになり フセインにとってはイギリスの力を利用してアラビアの統治者になるために大きく役立ちそうに思われた。

いつの世にも 人間の虚栄と欲望は ふとした一つのきっかけで みにくい姿をさらけ出すものらしい。かつてはアラブを裏切ってトルコに身を売り こんどはトルコを裏切ってイギリスに寝返ったフセインのやり方はアブドルアジーズを驚天させ 彼を憤激させるにじゅうぶんすぎた。フセインを転心にふみくらせたものはフセインの虚栄心をたくみについた一通の書簡と「イギリスにつけば 自分は保護され 傷つけられることはないだろう」という彼自身のおもわくだった。その書簡



第10図 故アブドルアジーズイブンサウド王

には「戦争終結後に ペルシャから紅海そして地中海にわたる大アラブ連邦を創設してフセインをその元首にする」という意味のことが書いてあったそうである。

イギリスとフセインの同盟はアブドルアジーズのヘジャーズ攻撃を挫折させてしまった。そしてフセインは3人の息子たちの援助で トルコ軍をヘジャースから追出しにかかったが トルコ軍の反撃はすさまじく フセインの旗色は次第に悪くなっていった。そこでイギリスは フセインを援助するために ジエッダやヤンボアの港に武器弾薬を輸送するとともに有能な将校を派遣した。その将校の中の一人が 後に有名になった T. E. ローレンス大尉である。

同盟を結んだもののあまり頼りにならないフセインを抱えたイギリスがトルコをたたく最良の策 それはネジドの王アブドルアジーズを対トルコ戦にフセインの軍隊と共に立上らせることであった。そのために イギリスは2人の使節をアブドルアジーズの元に派遣してアブドルアジーズに フセインと共に戦うことを 提言した。しかし聡明でかつ幼少の頃から戦乱の中を生きぬいて戦のあり方を身につけていたアブドルアジーズは2人の使節に イギリスがフセインを援助したことがあやまりであることを理路整然と指摘し もしイギリスのフセインに対する援助がなくなったらフセインは即刻自分の前に降伏せざるをえないと断言した。そしてこの交渉は不成功に終わったのである。

この交渉において2人の使節がアブドルアジーズから得たものは「イギリスがフセインに賭けたのは最大の失

敗だった」という確信以外の何ものでもなかった。

アブドルアジーズを支持しようと主張したインド局のフィルビー少佐の卓見を押えて フセイン支持を主張したアラブ局のローレンスの誤まった しかも強引な意見を採用したイギリスが その後に得たものは何であったろうか。それはここに述べるまでもなく 1953年風香る5月 オートバイ事故(自殺?)でハンドルに胸を貫かれ142時間もの間 生死の境をさまよいつつ死んでいった ローレンスの非痛な表情を満面にたたえた死顔によって示されているようである。

その後イギリスと不和になったフセインは 1924年にイスラム教徒の最高指導者は自分であると宣言したがこのことは全アラブの非難的となり ひいては アブドルアジーズの軍勢の前に アラビア半島からのがれていかなければならない結果を招いた。そしてついに名門ハム家のアラビア半島中央部における権勢はもろくも崩れ去ったのである。

その後も各地でアラビア統一のための戦いが行なわれた。そして ヘジャーズ ネジド アシール ハサの4地域を完全に制圧したアブドルアジーズ イブン サウド王(第10図)統率の下に 遂にサウジ アラビア王国が誕生したのである。時に 今を去る33年前1932年のことであった。これから後のサウジ アラビア王国の歴史は 国民の福祉と近代国家建設への情熱を傾けかけた王の努力による 新興独立国の堅実な発展の歴史といえよう。

半世紀余をアラビア統一に捧げた砂漠の豹アブドルアジーズは 1953年11月9日午前9時40分 メッカに近いタイフの王宮で 狭心症の発作に倒れ 永遠の旅路についた。そして満身に43の刀・槍の傷跡をとどめた砂漠の豹 アラビアの心臓の遺体は リヤードの南にある ごくふつうの墓場に葬られた。貧しい人の墓とならんで立つ名もなき小さな一つの白い墓石 それは愛するジャウハラ妃と先立った息子と共に安らぎ そして平和に語らう王のはじめでのいこいの場であることをわずかに示している。

灼熱の大砂漠ルブアルハリ我真只中に呻吟する若き王の前に現われた神のことば——私にとっては すべてが障害さえもが 手段にすぎない——を終生肝に銘じて生きぬいた王 死してなお貧しき民とともにありたいと願った王の姿には 現代に生きるわれわれが 教えられることが多い。王位は アブドルアジーズから3男のサウド(第11図)に継がれ そして1964年11月2日 サウド王の弟ファイサル皇太子に受け継がれた。どちらか



第 11 図 サウド 前王



第 12 図 ファイサル 現王

といえば 戦場に生きた父や兄にくらべて 戦場にも生きそして西欧の学問をも身につけた文武両道の人ファイサル王(第12図)の今後の生き方は 世界の耳目を集め爆発の危機をはらんでいるといわれる中近東にあっても真の独立国家の長として サウジ アラビア王国により高度の成長をもたらすことだろう。

中近東を旅行していると 古びた衣服を身にまとった貧しいアラビア人の姿を見かけることが少なくない。

がつくりと肩をおとしてとぼとぼと歩くそうした人たちの姿の中に 過去の栄光を忘れさりおのれをすてて強き者の意のままに細々と生きながらえなければならなかったアラブの歴史がにじみ出ているように思えることがある。 私たちの目にとまる新聞や雑誌の中には「アラビアには乞食や貧乏人が多い。それは指導者 統治者の悪徳による」といった意味のことが時折書かれているが 中近東をよく知っている者から見れば その記事がどの程度の事実にもとづいて書かれたものか 疑問視されるものが少なくない。 ア

ラブの貧困には確かにそうしたことにも原因がないとはいきれないだろう。 しかし その底に流れるものは何だろうか。 もし「先進諸国のみにくい欲望達成のシワヨセがアラブに貧しさを強いてきたのだ」と見たらそれはヒガ目だろうか。 近世史の中に書きとどめられた中近東の動きの中に そうした思いを馳せるのはひとり私だけではなからう。

(筆者は鉱床部)

新刊紹介

「探 鉱 ハ ン ド ブ ッ ク」

—あなたも探鉱ができます—

理学博士 藪部龍一著
ラテイス発行 ¥1500

本書は 第1編鉱業政策と専門用語の予備知識の項で地下資源の特殊性と探査の重要性 貿易の自由化とその対処などを説き また地質 鉱床探鉱 探鉱関係にわけて広範囲にわたる専門用語の解説を行なっている。

つづいて第2編として岩石のでかたと分け方 地質の年代と地層のわけ方 地殻に働いている地質作用 鉱床のでかた そのわけ方 鉱床探査のうえで手がかりとなる基本的な問題など 鉱床探査に必要な地質鉱床学的基礎知識を述べ つぎの第3編では実際の鉱床探査に必要な 土木関係 測量関係 各種の探鉱法 中小企業が開発しても採算性のあるもの などの知識とその応

用に関する事項がのべられている。

第4編では鉱山評価 鉱量計算 品位とサンプリングなどの探鉱実務の知識および鉱業関係法規の解説がなされ 関係書類の書き方 調査 分析 鑑定などの依頼方法についても述べられている。

第5編には運搬関係事項 製錬関係をのぞいた 鉱業関係各機関 鉱業 地質関係の出版物 鉱業関係各種単位の対比表などの諸表があげられている。 本書は以上のような地下資源の探査から探鉱開発にいたるまでの広範多岐にわたる基礎的な問題 実務上の問題点をわかりやすく また興味深く B 6版 565頁(142の図表 162の付表)にまとめたもので 中小鉱業者 現場の鉱業マン 鉱業愛好者や鉱山師のハンドブック また学校における一般教養としての参考書として最適なものであろう。

このハンドブックは発売と同時に 好評のため初版売切れとなり 目下再版中で 出版元では希望者は直接下記へ予約されるよう望んでいる
東京都文京区音羽7の24
株式会社 ラテイス Tel (941) -2439